

通常学級の子どもたちと読み書き困難児の カタカナ書字習得状況

野口法子・窪島 務

The Katakana Writing ability of the normal Children and dyslexic (reading and writing difficulty) children

Noriko NOGUCHI and Tsutomu KUBOSHIMA

要旨 読み書き困難児のカタカナに関する先行研究がほとんどないことにより、本研究では、まず、通常児のカタカナ書字の習得状況を調査し、その分析を行った。その結果、カタカナ書字は、清音・濁音・拗音ともプロセスに違いはあるが、3年生でほぼ習得され、4年生で完全に習得されることが分かった。次に読み書き困難児のカタカナ書字習得状況を分析してみると、清音・濁音・拗音のいずれかで当該学年に及ばないものが、17名中14名でそのうちの6名がすべてにおいて当該学年よりも2学年以下のレベルであった。また、カタカナとともに平仮名習得度も低い傾向にあり、そして漢字の習得度との関係は、本研究では明確な結果は得られなかった。

Abstract Since there were few preceding studies about the Katakana of dyslexic children, in this study, I first analyzed the Katakana writing ability of normal children. The results showed that normal children acquire Katakana of voiceless sound (seion), voiced consonant (dakuon) and palatalized syllable (youon) in 3rd grade, and master them completely in 4th grade, but the learning process is different for Katakana of seion, dakuon, youon.

When the Katakana writing ability of dyslexic children was analyzed, fourteen of seventeen dyslexic children had difficulty with at least one of seion, dakuon, youon, and of these, six children had difficulty with all three. Children were regarded to have difficulty if their Katakana writing ability was two school years below their actual school grade. Children who had difficulty with Katakana tended also to have difficulty with Hiragana.

Kanji learning ability of the children (subject) could not be assessed in this study.

1. 問題と目的

先行研究において、漢字の書字における読み書き困難児の特徴としては、偏と旁の入れ替えや当て字、造語、鏡文字などがあげられ、平仮名においては、音韻意識が未発達、語彙の想起ができない、鏡文字、特殊音節にエラーが多いなどがあげられるが、読み書き困難とカタカナ

に関する研究は、ほとんど見出すことができない。数少ない読み書き困難とカタカナに焦点を当てた研究として、「カタカナと漢字に関する発達性読み書き障害の1症例—認知神経心理学的分析—」(酒井等 2002)や「学習障害と診断された児童の通級指導教室での指導事例研究—カタカナの習得が可能になった実践を通して—」(堀部等 2005)などがある。前者は、ひ

らがな・カタカナ・漢字障害からカタカナ・漢字障害への改善移行形の症例の分析であり、指導方法にまでは及んでおらず、後者は、平仮名の習得がほぼできており次にカタカナの習得に取り組んでいる。認知特性を考慮した指導法を実施し、カタカナを習得した内容のものである。

しかし、カタカナの一般的習得状況を調査研究したものではなく、カタカナ習得を評価する基準が存在しない。本研究では、まず通常の子どもたちのカタカナ習得状況を調査把握する。そして、その結果と読み書き困難児とのカタカナ習得状況の比較を行い、カタカナに関する読み書き困難児の特徴を把握するとともに、カタカナと漢字・ひらがなの習得状況の関係性について検討する。

2. 方法

対象児：草津市内のY小学校1～6年生（1年28名、2年26名、3年34名、4年30名、5年30名、6年28名）と滋賀大キッズカレッジで指導を受けている読み書き困難児17名（2年1名、3年名、4年名、5年名）

調査内容：問題用紙（A4）15枚で、清音（45）、濁音・半濁音（22）、拗音など特殊音節（25）を含んだ単語の絵をランダムに並べ、その絵を見て単語の答えをカタカナで書く。小学生になじみのある物の絵を採用した。特殊音節（特に拗音）については、それを含む物に限界があるため、小学校2年生までの漢字から単語や漢字一文字を表記し、読み仮名をカタカナで解答する方法を取った。問題数は、絵問題73問、漢字読み問題20問の計93問。絵をみて答える方法のため、すべての文字を網羅できず、清音の「ヲ」と濁音・半濁音・拗音に関しては、以下の文字は省いた。（ヂヅゼニヤニヨヒユミヤミユリヤギヤヂユヂョビユピュピョ）

手続き：調査期間は、2008年11月初旬～12月初旬までの一ヶ月間、検査者が学級単位で集団的に実施した。滋賀大キッズカレッジで指導を受けている17名中9名に対しては、同じ問題の平仮名版もカタカナ検査の2週間後に実施した。

分析方法：絵を見て単語を解答するため解答が

検査者の意図に沿ったものでない場合があるが、その場合は無回答として扱い、各学年の正答数を分析の対象とした。

3. 結果

①通常児のカタカナ1文字の正答数と学年間の特徴

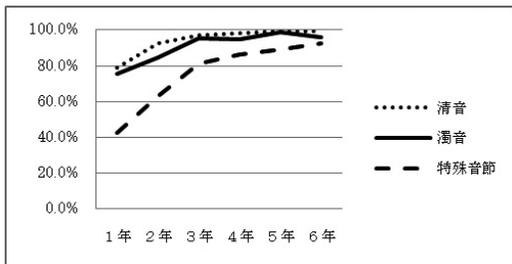
表-1に示すように、カタカナ清音1文字に関しては、1年生では平均正答数35.5（正答率78.8%）、SDは12.56と他学年に比較すると、習得数は低く、またばらつきもある。40～45文字習得しているものが60.7%（17人）を占めるが25～29文字習得しているものが14.3%（4人）と第二の大きな集団となっている（図-2）。そして、ほとんど習得できていないものから45文字中半分以上は習得しているものをあわせた習得途上の者が40%（11人）存在している。2年生では、平均習得数も40文字以上に増加しSDも6.41とばらつきが狭まり、この段階で80%（21人）以上の者が習得し（図-3）、そして3～6年生では、94.2～100%の者が習得している。図-4より、3年生においては、45文字完全に習得しているものが47.1%、そして40～44文字を習得しているものが47.1%と同じ割合で分かれているが、4年5年6年と学年が上がるごとに45文字完全に習得しているものの割合が66.7（図-5）、73.3、85.7と増加している。このように清音は1～2年生の2年をかけてかなりのレベルが、そして3年生でほぼ習得され、4年生で完全に習得されていく。

カタカナ濁音1文字に関しては、1年生では平均正答数16.6（正答率75.6%）、2年生では18.6（84.6%）、3年生では20.9（正答率95.2%）であり、1～3年の3年をかけてほぼ習得される。清音と同じく3年をかけて習得していくが、清音が、2年生で急激に習得度が増加することに比べ、濁音の習得のされ方は、20文字以上習得しているものの割合でみると、1年生では57.1%、2年生では69.2%、そして3年生では94.1%と清音に比べて緩やかに習得されていく。

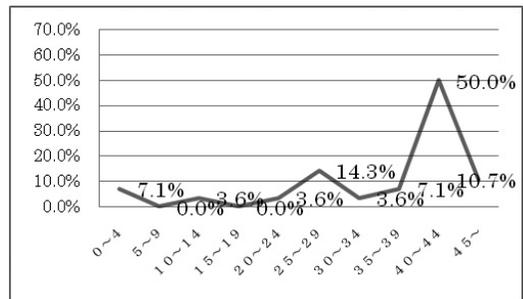
拗音に関しては、1年生では平均正答数10.6（正答率42.4%）、図-9より習得文字数14文字以下のものが55.3%を占め、かなり不完全な

表一 通常学級在籍児における学年別カタカナ1文字正答数分布

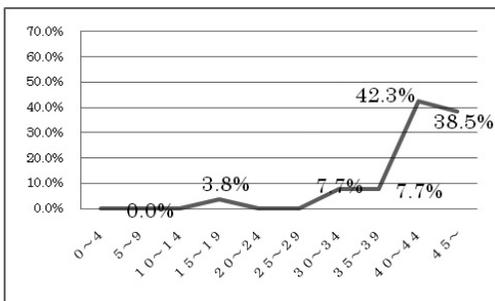
学年	清音平均 (SD)	濁音平均 (SD)	拗音平均 (SD)
	n=45	n=22	n=25
1 学年 (N=28)	35.5 (12.56)	16.6 (6.77)	10.6 (7.40)
2 学年 (N=26)	41.6 (6.41)	18.6 (5.54)	15.8 (7.85)
3 学年 (N=34)	43.6 (2.30)	20.9 (1.07)	20.3 (4.01)
4 学年 (N=30)	44.3 (1.47)	20.9 (1.38)	21.6 (1.96)
5 学年 (N=30)	44.6 (0.77)	21.7 (0.54)	22.3 (1.81)
6 学年 (N=28)	44.6 (0.99)	21.1 (0.89)	23.2 (1.44)



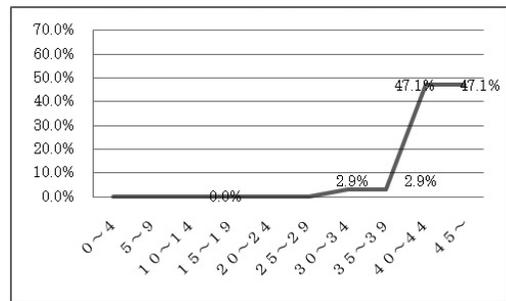
図一 1 カタカナ一文字学年別正答率



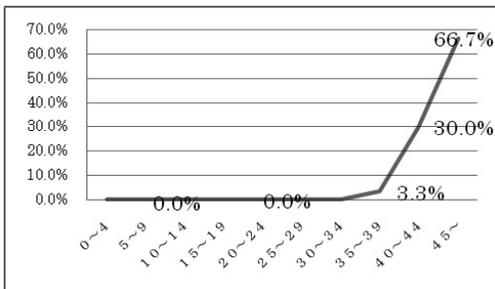
図一 2 1年生カタカナ清音書字数分布
縦軸：児童の割合 横軸：書字数



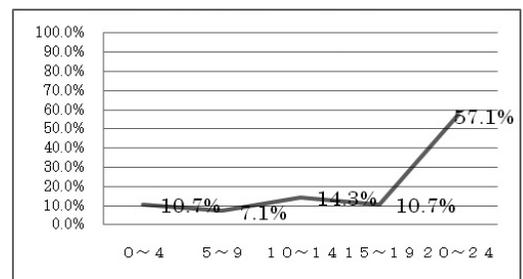
図一 3 2年生カタカナ清音書字数分布
縦軸：児童の割合 横軸：書字数



図一 4 3年生カタカナ清音書字数分布
縦軸：児童の割合 横軸：書字数



図一 5 4年生カタカナ清音書字数分布
縦軸：児童の割合 横軸：書字数



図一 6 1年生カタカナ濁音書字数分布
縦軸：児童の割合 横軸：書字数

状態である。2年生になると図-10に示すように習得文字数が14文字以下のものは26.9%と減少し、習得文字数が15~19文字のものは30.8%、習得文字数が20文字以上のものが42.3%と習得率は上昇してくる。そして3年生では、20文字以上の者が76.5%と急増し(図-11)、その後は、4~6年にかけて平に緩やかに伸びていく。

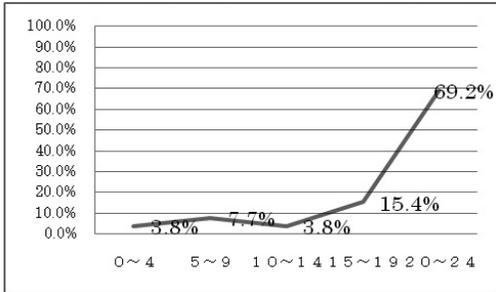


図-7 2年生カタカナ濁音書字数分布
縦軸：児童の割合 横軸：書字数

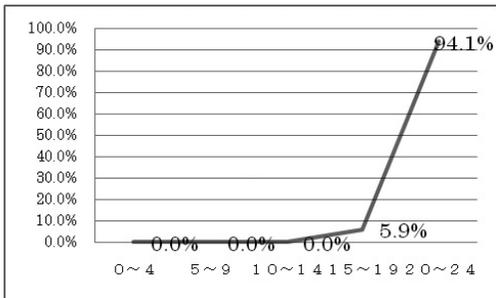


図-8 3年生カタカナ濁音書字数分布
縦軸：児童の割合 横軸：書字数

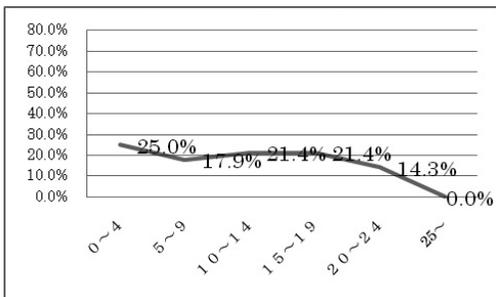


図-9 1年生カタカナ拗音書字数分布
縦軸：児童の割合 横軸：書字数

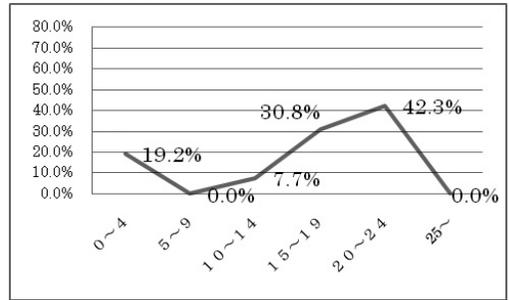


図-10 2年生カタカナ拗音書字数分布
縦軸：児童の割合 横軸：書字数

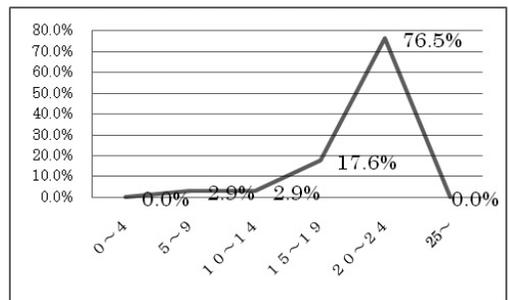


図-11 3年生カタカナ拗音書字数分布
縦軸：児童の割合 横軸：書字数

清音に関して学年間の比較を行うため Kruskal Wallis 検定により順位相関を求めたところ、1%水準 ($\chi^2=50.003, pf=5, p<.000$) で有意な相関が認められたため、次に各学年間の比較を Mann-Whitney の U 検定を実施した結果、表-2のとおりであった。4年5年6年の間では相互に有意な差はみられず、4年以上は完全に習得しているといえる。これは、図-1~5でみてきた結果と一致している。濁音に関して同様に実施し表-3の結果を得、5年生はすべての学年において有意差がある結果となっている。濁音では5年生は全員が書字数20文字以上であった。このことを考慮した上で結果をみると、濁音の書字はほぼ2年生で習得されていることになる。拗音では表-4で示すように、有意差がないのは5年6年であり、5年生でほぼ完全に習得されると考えられる。

表-2 清音書字学年比較

	1年	2年	3年	4年	5年	6年
1年	—					
2年	.0087 **	—				
3年	.0003 **	.4104 ns	—			
4年	.0000 **	.0189 *	.0822 ns	—		
5年	.0000 **	.0039 **	.0166 *	.5332 ns	—	
6年	.0000 **	.0005 **	.0033 **	.1270 ns	.3329 ns	—

*5%水準の有意差 **1%水準の有意差

表-3 濁音書字学年比較

	1年	2年	3年	4年	5年	6年
1年	—					
2年	.2112 ns	—				
3年	.0158 *	.5554 ns	—			
4年	.0181 *	.4876 ns	.9185 ns	—		
5年	.0001 **	.0034 **	.0002 **	.0011 **	—	
6年	.0091 **	.2779 ns	.5083 ns	.6138 ns	.0087 **	—

*5%水準の有意差 **1%水準の有意差

表-4 拗音書字学年比較

	1年	2年	3年	4年	5年	6年
1年	—					
2年	.0086 **	—				
3年	.0000 **	.0178 *	—			
4年	.0000 **	.0021 **	.3137 ns	—		
5年	.0000 **	.0001 **	.0229 *	.1260 ns	—	
6年	.0000 **	.0000 **	.0002 **	.0008 **	.0811 ns	—

*5%水準の有意差 **1%水準の有意差

②通常児と読み書き困難児との比較

次に、滋賀大キッズカレッジで指導を受けている読み書き困難児17名のカタカナ清音・濁音・特殊音節それぞれの正答数を見てみると、表-5のようになる。読み書き困難児各個人の正答数を通常の学年別正答数と比較してみると、特にA(2年):28(1年以下)11(1年以下)6(1年以下)(清音・濁音・拗音の順で()はどの通常学年に相当するかを示している)、F(4年):41(2)19(2)19(2)、G(4年):32(1年以下)15(1年以下)15(2)、H(4年):38(1)19(2)11(1)、I(4):31(1年以下)15(1年

以下)7(1年以下)、J(4):19(1年以下)8(1年以下)0(1年以下)は、清音・濁音・拗音のすべてが、当該学年よりも2学年以下のレベルとなっており、17人中6人と35.3%を占めている。そして、A(2)、I(4)、J(4)においては、清音・濁音・拗音ともに1年生以下の状態である。

また残りの11名もC(3年)、M(5年)、P(6年)以外は、いずれかの項目で当該学年に及ばない状態である。

表-5 読み書き困難児のカタカナ1文字正答数と漢字検査正答率

氏名(学年)	清音	濁音	拗音	漢字検査正答率
A(2)	28(0)	11(0)	6(0)	I群 70
B(3)	41(2)	22(6)	20(3)	I群 87
C(3)	44(6)	21(6)	23(6)	II群 83
D(3)	41(2)	18(2)	13(1)	I群 78
E(3)	40(1)	22(6)	19(2)	I群 35
F(4)	41(2)	19(2)	19(2)	I群 65
G(4)	32(0)	15(0)	15(2)	I群 49
H(4)	38(1)	19(2)	11(1)	
I(4)	31(0)	15(0)	7(0)	
J(4)	19(0)	8(0)	0(0)	I群 59
K(4)	44(6)	22(6)	19(2)	
L(4)	42(2)	21(6)	17(2)	I群 69
M(5)	44(6)	22(6)	24(6)	II群 60
N(5)	40(1)	22(6)	22(5)	I群 31
O(6)	40(1)	22(6)	13(1)	
P(6)	45(6)	22(6)	23(6)	II群 53
Q(6)	41(2)	22(6)	21(4)	I群 38

*清音・濁音・拗音の()は正答数に対する相当学年を表している

*漢字検査は滋賀大キッズカレッジのもので、当該学年より1学年下のものを実施

④読み書き困難児におけるカタカナとひらがなの関係

読み書き困難児のうち9名の平仮名書き検査の正答数を見てみると(表-6)、A:41 18 3(清音・濁音・拗音の順)、B:41 20 12、C:45 22 23、D:44 17 15、F:40 21 21、G: 41 16 17、H:34 15 17、M:45 22 22、N:42 21 22であり、全体に拗音の習得数が低く、C、M以外は平仮名清音においても完全に習得できておらず、カタカナ習得との関係でみるとA、G、Hは、当該学年より2学年以下である。平仮名の習得度がよい者は、片仮名の習得度もよいという関係がみられる。

⑤読み書き困難児におけるカタカナと漢字の関係

カタカナの習得度と漢字の習得度の関係性を見るために、2009年3月に滋賀大キッズカレッジ漢字検査を実施したもので、表-5より、カタカナ習得数が当該学年よりも2学年下のA、F、G、Jの4名と中間層のB、D、E、L、N、Qの6名をI群とし、習得数が、学年相応またはそれ以上のC、M、Pの3名をII群とし、I

II群それぞれの漢字習得率の平均をグラフに表すと図-12のようになる。I群は58.1、II群65.3となりカタカナ書字が弱い群は漢字の正答率が7.2ポイント低いという結果になった。

⑥1956~58年の国立国語研究所が実施した調査との比較

1956年の国立国語研究所が実施した調査によると1年生の12月ではカタカナ清音の書きの正答率は実験校62.0%、協力校72.2%、濁音・半濁音では実験校58.0%協力校70.6%である。

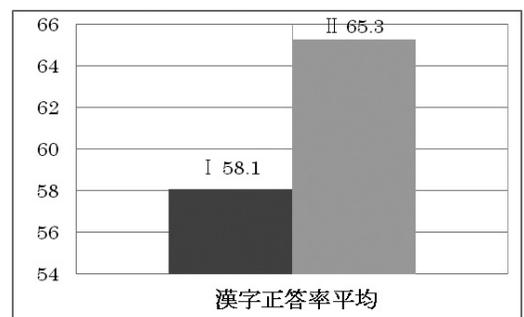


図-12 カタカナ群別漢字正答率平均

I:カタカナ学年不相応群 II:カタカナ学年相応群

表一 6 読み書き困難児のひらがな 1 文字正答数

氏名 (学年)	清音	濁音	拗音	カタカナ
A (2)	41	18	3	×
B (3)	41	20	12	△
C (3)	45	22	23	○
D (3)	44	17	15	△
F (4)	40	21	21	△
G (4)	41	16	17	×
H (4)	34	15	17	×
M (5)	45	22	22	○
N (5)	42	21	22	△

×カタカナ習得数2学年以上 △カタカナ習得数当該学年以上 ○カタカナ習得数当該学年以上 △カタカナ習得数それ以外

また、1958年の調査では、3年生の1学期の清音正答率は、実験校85.2%、協力校81.8%、濁音・半濁音は、実験校80.0%、協力校80.7%となっている。それに対し、2008年12月のY小学校の1年生カタカナ清音正答率78.8%、濁音・半濁音正答率75.6%、3年生カタカナ清音正答率96.9%、濁音・半濁音正答率95.2%であり、1・3年生とも50年前よりも正答率は、清音では7~16%、濁音では5~17%アップしている。1958年の国立国語研究所が実施した調査での促音・拗音・長音の特殊音節（10単語のみで検査実施）では、3年2学期の正答率は実験校51.0%、協力校61.6%であり、2008年Y小学校3年では、76.1%と特殊音節においては15~25%レベルアップしている。

表一 7 1956~1958年の国立国語研究所実施カタカナ書字正答率

	1年	3年
清音	62.0 (72.2)	85.2 (81.8)
濁音・半濁音	58.0 (70.6)	80.0 (80.7)
特殊音節		51.0 (61.6)

⑦単語としてのカタカナの習得状況

通常児の単語別正答率のベスト10は、1.ヘビ(96.6) 2.ハサミ(94.3) 3.メロン(93.2) 4.バナナ(92.6) 5.スイカ(92.6) 6.ネズミ(92.0) 7.カ

ボチャ(92.2) 8.ペンギン(91.5) 9.モグラ(91.5) 10.ゴリラ(91.5) であり、読み書き困難児のベスト10は、1.スイカ(100) 2.メロン(88.2) 3.モグラ(88.2) 4.バナナ(88.2) 5.ゲーム(88.2) 6.レモン(88.2) 7.コアラ(82.3) 7.ペンギン(82.3) 9.ゴリラ(82.2) 10.トランプ(82.2) となっている。カボチャの拗音とゲームの長音以外は、すべて清音と濁音となっている。拗長音と促音の混じるチューリップの正答率は、通常児58.0%、読み書き困難児47.0%、拗音と促音そして長音の混じるジェットコースターでは、54.0%、35.2%であり、拗長音のシュークリームは、47.2%、17.6%と正答率は、通常児、読み書き困難児とも低くなっている。

1文字ではなく単語としての通常児の正答率と学年間の比較を行うために、①清音だけから成る5モーラの単語「カタツムリ」、②清音と濁音から成る「ユキダルマ」、③清音と拗音から成る「ジャンケン」、④清音・濁音・長音から成る「カンガルー」、⑤清音・拗長音から成る「ビョウイン」、⑥清音・拗長音・半濁音・促音から成る「チューリップ」、⑦5モーラではないがもっとも難しいであろう「ジェット

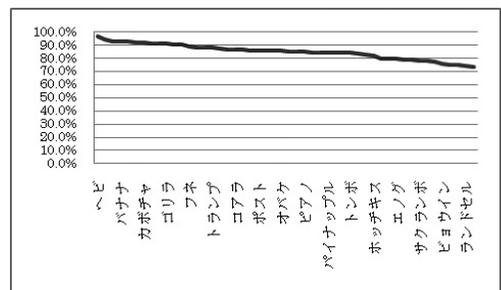


図-13 通常児の単語読み正答率

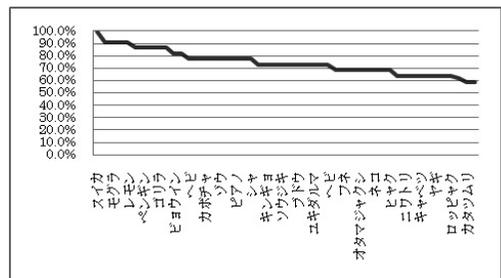


図 14 読み書き困難児の単語正答率

コースター」(清音・拗音・長音・促音から成る)において、Mann-Whitney のU検定を実施した。「カタツムリ」「ユキダルマ」「ジャンケン」「カンガルー」では1年生と他学年の間に有意差が認められたが、その他の学年間には認められなかった。清音・拗長音・半濁音・促音が混じる

「ジェットコースター」では、表-8に示すように3年生までは、他学年の間に有意差が認められる。この結果からは、4年生でどのようなカタカナ単語でも書けるようになると考えられる。

表-8 単語「ジェットコースター」書字学年比較

	1年	2年	3年	4年	5年	6年
1年	—					
2年	.2719 ns	—				
3年	.0090 **	.1376 ns	—			
4年	.0002 **	.0079 **	.1813 ns	—		
5年	.0000 **	.0002 **	.0133 *	.2469 ns	—	
6年	.0000 **	.0002 **	.0090 **	.1824 ns	.8366 ns	—

*5%水準の有意差 **1%水準の有意差

⑧カタカナ書字におけるエラー

通常児と読み書き困難児ともに共通するエラーは、「ツ」と「シ」、「ン」と「ソ」であり、読み書き困難児には、「ミ」「オ」に鏡文字が見られた。

4. 考察

本研究の目的は、小学生通常児のカタカナ書字習得状況を明らかにし、読み書き困難児と比較することにより、カタカナ書字における読み書き困難児の特徴を検討することであった。調査の結果は以下の通りであった。①通常児のカタカナ清音の習得は2年生でかなりのレベル、3年生でほぼ習得され、4年生で確立される。濁音も清音と同じく3年生でほぼ習得されるが、清音よりも3年間で緩やかに習得され、4年生で確立される。拗音は、3年生でほぼ習得されるがその後も4~6年生にかけて緩やかに伸びていく。②読み書き困難児では、清音・濁音・拗音のいずれかで当該学年に及ばないものが、17名中14名でそのうちの6名がすべてにおいて当該学年よりも2学年以下のレベルであった。③カタカナ習得度の低いものは、平仮名習得度も低い傾向にあった。④また、カタカナの習得度と漢字の習得度の関係を見た結果、

カタカナ書字が弱い群は漢字の正答率が7.2ポイント低いという結果になった。⑤1956年の国立国語研究所の調査との比較では、カタカナ書字正答率は2008年の本研究の値が、清音では7~16ポイント、濁音では5~17ポイント、拗音では15~25ポイントレベルアップしている。⑥カタカナ単語の正答率を順位別に比較すると通常児と読み書き困難児とで差異はなく拗音、拗長音、促音が入り混じった単語は、正答率が低かった。4年生でどのようなカタカナ単語でも書けるようになると考えられる。

以上の結果より、通常児のカタカナ書字と読み書き困難児のカタカナ書字の特徴に関して考察を行う。まず、通常児のカタカナ習得状況について、1956年の調査よりも大幅に習得率が上昇していることの要因としては、小学校におけるカタカナ教育が促進されているわけではなく(1956年では、カタカナは2年生で学習する。現在の学習指導要領では「1・2年で平仮名、カタカナを読み書くこと」となっている)50年前に比べ、平仮名のみならずカタカナにおいても、子どもたちは、生活環境の中で文字に接する機会が増えているためと考えられる。日本語の語彙は約230,000語あり、ドイツ語(約185,000語)やフランス語(約100,000語)の語彙に比べてかなり多く、外来語が多いのがそ

の理由である。明治・大正・昭和で積極的に外来語を取り入れ、近年では、新聞・雑誌・テレビ・ラジオは言うでもなくあらゆるところでカタカナ語が氾濫している。子どもたちは、こういった環境の中で意識することなく、カタカナ語に接する機会を多く持つことになる。

また、1956年の国立国語研究所の調査では、以下のことが分かったと述べている。それは、カタカナ表記をされるべき語の表音法が身につくにくいこと、長音を書き表す際の抵抗が、平仮名における長音の書き表し方とカタカナの場合との相違によるものであることが察せられること、カタカナ文字力の問題は、書字力ことに、促音・拗音・長音を含む語の書字力にあることである。今も同じことがみられ、拗音などの特殊音節の習得に時間がかかる。その理由として、平仮名と同じく特殊音節は文法的要素が入り込んでくるため、それを使いこなし慣れるためには清音よりも時間を要することが挙げられる。

読み書き困難児においてカタカナ1文字の書字が、当該学年に及ばないことは、漢字・平仮名と同様に詳細な研究が必要である。本研究では実態のみが把握できた段階であり、詳細は今後の課題である。

次に、単語としてのカタカナの習得状況であるが、4年生でどのようなカタカナ単語でも書けるようになる。このことは、カタカナ1文字(清音・濁音・拗音)の習得が4年生で完了することと一致している。単語としてのカタカナは、清音・濁音・拗音・長音・促音が入り混じるため、1文字を習得するよりも複雑になると考えられるが、単語も1文字も同じ時期に完成している。

次に、カタカナの成り立ちと特徴からの視点で結果の考察を行う。

日本語の書き言葉の歴史は、奈良時代に他国の文字である漢字で書き表そうとしたことに始まるが、中国語(孤立語)と日本語(膠着語)は体系の異なる言語であるため、中国語にはない助詞や助動詞、敬語表現などを表すために、漢字の特徴である表意性を削ぎ落とし、音としてだけ使う「万葉仮名」という漢字の新たな使用法が生まれた。その万葉仮名の一部を書いたものがカタカナである。そして、現在のカタ

カナのもとになった万葉仮名は表-8に示した通りである。平仮名も万葉仮名から作られたものであるが、カタカナが万葉仮名の部分を取ったのに対し、平仮名は、文字を連続体ととらえ、全体を崩したものである。カタカナは、万葉仮名の一部を取って発生したものであり、形はより漢字に近いという漢字的要因を持つとともに、1文字では意味をなさず音的な要素としての平仮名的要因をも併せ持っている。

単語の読みに関して、読み書き困難児の認知過程において、二重ルートカスケードモデル(1993 Coltheatら)を考える場合、音のみである平仮名は主に音韻ルートをそして意味を併せ持つ漢字は、意味ルートを経過する。それならば、二つの要因を持つと考えられるカタカナは、平仮名よりも漢字に近いルートで認知されることが考えられるため、一つの仮説として、カタカナの習得度の高い読み書き困難児は、漢字の習得度も高いという仮説を立てることが出来る。しかし、「書き」においては、脳の認知の各モジュール間の連結レベルが「読み」よりもより複雑化していくため、実証していくことは極めて難しくなる。本研究のデータでは、このことを検証することはできないが、これを基に漢字書字習得とカタカナ書字習得の関係性を検討する必要はあると考えられる。

表-9 カタカナのもとになった万葉仮名

ワ (和)	ラ (良)	ヤ (也)	マ (万)	ハ (八)	ナ (奈)	タ (多)	サ (散)	カ (加)	ア (阿)
キ (井)	リ (利)		ミ (三)	ヒ (比)	ニ (二)	チ (千)	シ (之)	キ (幾)	イ (伊)
	ル (流)	ユ (由)	ム (牟)	フ (不)	ヌ (奴)	ツ (川)	ス (須)	ク (久)	ウ (宇)
エ (慧)	レ (礼)		メ (女)	ヘ (部)	ネ (禰)	テ (天)	セ (世)	ケ (介)	エ (江)
ヲ (乎)	ロ (呂)	ヨ (与)	モ (毛)	ホ (保)	ノ (乃)	ト (止)	ソ (曾)	コ (己)	オ (於)

ナ

5. 今後の課題

読み書き困難児のカタカナ書字の特徴を述べていくには、読み書き困難児の個々のケースを認知能力とともに分析していくことが重要であると考えられるが、本研究では、そこまで及ばず、今後の課題として検討する必要がある。

引用・参考文献

酒井厚・宇野彰等（2002）カタカナと漢字に関する発達性読み書き障害の1症例—認知神経心理学的分析—, 小児の精神と神経, 42（4）, 333-338
堀部修一・別府悦子（2005）学習障害と診断された児童の通級指導教室での指導事例研究—カタカナの習得が可能になった実践を通して—, 中部学院大学・中部学院大学短期大学紀要, 6, 121-134
国立国語研究所報告（1956）低学年の読み書き能力, かたかな能力の発達, 122-145

国立国語研究所報告（1958）中学年の読み書き能力, かたかな能力の発達, 168-197
国立国語研究所報告（1964）, 小学生の言語能力の発達, 116-126
武部良明（1980）日本語教育における片仮名の問題, 日本語教育 42号 1-16
柏木成章（1984）現代日本語における片仮名の役割についての一解釈—特に平仮名との対比において—, 大東文化大学紀要, 人文科学（22）53-63
山口仲美（2006）日本語の歴史, 岩波新書
石川九楊（1999）二重言語国家・日本, NHK ブックス
窪島務（2005）読み書きの苦手を克服する子どもたち, 文理閣
窪島務（2008）読み書き障害の概念, アセスメント, 診断と教育的指導の理解, 障害者問題研究 35（4）2-13
熊抱ゆかり（2005）氾濫するカタカナ語, 歯止めから共生へ, 福岡大学人文論叢 37（2）633-647